

江戸後期から明治20年代までの 「言う」の意味を表す尊敬表現 —「おっしゃる」を中心に—

山 田 里 奈

1. はじめに

「おっしゃる」は江戸時代中期から使用され、現代でも敬語動詞として使用されている。また、山西正子（1972）が触れているように、出自は異なるが形の上で類似する「いらっしゃる」の使用拡大を「おっしゃる」が支えたと考えられることができるが、これについては他の機会で述べたい。この語は、表す敬意が江戸中期から高いまま（対等以上に用いる）保たれてきた。出自の研究や「おしゃる」との使い分けについての研究は見られるが、江戸後期から明治時代における使用実態についての研究は管見の限り見られない。特にこの時期、「お（ご）～なさる」（以下、「お～なさる」と記し、「ご～なさる」も含むこととする）形式が当時の一般的な尊敬表現形式であり、対等以上で用いられたことは山崎久之（1966）や小島俊夫（1974）などが明らかにしている。これを踏まえ、対等以上で用いられた「おっしゃる」と「おいひなさる」の使用差について疑問が生ずる。そこで、江戸後期から明治20年代（以下、「明治」）までを対象として、対称の用法における「おっしゃる」の使用実態を中心に、「言う」の意味を表す尊敬表現の変遷を考察することにより、①「おっしゃる」と「おいひなさる」の使用の相違、②①から考えられる「おっしゃる」の敬意が保たれた理由について明らかにしたい。

2. 先行研究

大倉浩（1986）は、「おっしゃる」と「おしゃる」の両方を見ることができる『狂言記』正篇を扱い、「おっしゃる」の成立について論じている。そして、下二段型の「おっしゃる」は「仰せらるる」に、四段型の「おしゃる⁽¹⁾」は「仰せある」に由来すること、また、「おっしゃる」、「おしゃる」は別語であり、待遇面から見てもその使用に違いが見られることを指摘している。『日本国語大辞典 第二版』においても大倉（1986）と同様、狂言記・角水（1660）の「なぜに、いやとおっしゃるるぞ」を初出例としている。その後、近松門左衛門の世話浄瑠璃などで「おしゃる」と「おっしゃる」が拮抗して使われ、「おっしゃる」優勢となっていく。江戸後期における「おっしゃる」については、その表す敬意について、山崎（1966）や小島（1974）の研究がある。山崎（1966）は、「おっしゃります」を「第一段階（最高敬語）A（晴の）ことば」に、「おっしゃる」を「第二段階（普通敬語）A（晴の）

ことば」に分類する。小島（1974）は、後期江戸語（十九世紀前半、滑稽本・人情本）では、「おっしゃいます」を「段階 A」に分類し、「おっしゃる」を、「段階 B₁」と「段階 C₂」に分類する。十九世紀東京語（十九世紀後半、言文一致体の会話による小説）も同じ段階のままである。

3. 調査対象資料・方法

3.1 調査対象資料 江戸後期の資料として洒落本、滑稽本、人情本、明治の資料として開化期から明治20年代末までの資料を用いる。各資料の詳細は最後のページに記す。用例には下線部のみ記すこととする。

【江戸後期】『跣婦人伝』『遊子方言』『甲斐新語』『浮世の四時』『角雞卵』『一旦土堤』『古契三娼』『傾城買四十八手』『南品傀儡』『傾城買二筋道』『大通契語』『商内神（以上、「洒落本」）』『浮世風呂』『浮世床』『八笑人』『七偏人（以上、「滑稽本」）』『春色梅児褒美』『春告鳥』『春色恵の花』『閑情末摘花』『春色恋廻染分解』『毬唄三人娘（第三編まで）（以上、「人情本」）【明治】『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』『怪化百物語』『巷説兎手拍』『当世書生氣質』『妹と背かゝみ』『雪中梅』『浮雲』『花間鶯』『緑蓑談（前・続⁽²⁾）』『細君』『二人女房』『多情多恨』

3.2 方法

- ・「はじめに」で述べたように、特に対等以上で用いる「おっしゃる」と「おいひなさる」の使用の相違を見ていくために、本稿では尊敬表現にしぼって用例を収集し、表を作成する。
- ・「おっしゃいます」「おっしゃる～ます⁽³⁾」「おっしゃる」をまとめていうとき「おっしゃる」系と呼ぶ。「おいひなさる」系も同様である。なお、聞き手に対して用いる例を扱い、命令表現（命令・禁止）も対象とし、表には（ ）で内訳を記す。
- ・対等の B の関係以上で用いる表現を高い敬意を表す尊敬表現であると認める。特に中流以上の人々は丁寧な表現を好むため、対等の B の関係で互いに用いる傾向がある。

(1) 上下関係の判断基準 石綿敏雄・近藤豊勝（1973）を参考に、下→上の A の関係、上→下の C の関係（主従関係、身分差、年齢差（子→親、親→子の関係含む））、対等の B の関係（身分差なし）に分類する。なお、親疎関係については適宜注記する。

(2) 階層 各階層については、山崎久之（1966）、小島俊夫（1974）、小松寿雄（1985）、井藤幹雄（1986）を参考に、以下のように分類する。

【中流以上】（江戸後期）お屋敷奉公経験者、またはその予定者、商家の旦那・妻、丁稚や居候または下男下女を家に置く者（明治）官員、代言人、権妻、湯屋の亭主、書生等

【下層】（江戸後期）勇み肌、伝法者、下男下女、乳母、子守、あくたれあま、「長屋に住む」人等（明治）車夫、大工、芝居者、野幫間、店の女、下男下女等

【芸妓】（江戸後期・明治）花魁、芸妓、唄女

4. 江戸後期における使用実態

【表1, 2, 3】を見ると、「おっしゃる」系が対等のBの関係（以下単にBと記す）以上に偏ることがわかる。「はじめに」で述べたように「おいひなさる」系も似た分布を示しているため、比較し

表1 中流以上の人々の使用

述部 \ 関係	A		B		C		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
性別									
おっしゃいます	2 (1)	8 (0)	2 (2)	4 (4)			4 (3)	12 (4)	87 (8)
おっせんす	1 (1)	1 (0)					1 (1)	1 (0)	
おっしゃる～ます	2 (0)	4 (0)	3 (0)	2 (0)			5 (0)	6 (0)	
おっしゃる	7 (0)	25 (0)	12 (0)	12 (0)	2 (0)		21 (0)	37 (0)	
おいひなさる	1 (0)	4 (0)		2 (0)*	1 (1)	4 (3)	2 (1)	10 (3)	12 (4)
おいひだ		12 (0)	1 (0)	6 (0)		6 (1)	1 (0)	24 (1)	25 (1)
おいひ		1 (1)					0 (0)	1 (1)	1 (1)
いひなんす					1 (0)		1 (0)	0 (0)	1 (0)
いひなさる	4 (0)		15 (10)		12 (7)	4 (3)	31 (17)	4 (3)	35 (20)
いはっしゃる			5 (4)				5 (4)	0 (0)	5 (4)
いはした(て)			5 (5)	1 (0)	1 (1)		6 (6)	1 (0)	7 (6)
のたまふ	1 (0)						1 (0)	0 (0)	1 (0)
計	18 (2)	55 (1)	43 (21)	27 (4)	17 (9)	14 (7)	78 (32)	96 (12)	174 (44)

* 2例とも男性が女装をしたときの発話で用いている。

表2 下層の人々の使用

述部 \ 関係	A		B		C		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
性別									
おっしゃいます		4 (2)					0 (0)	4 (2)	25 (2)
おっしゃる～ます	1 (0)	2 (0)					1 (0)	2 (0)	
おっしゃる	9 (0)	9 (0)					9 (0)	9 (0)	
おいひだ		1 (0)		2 (0)			0 (0)	3 (0)	3 (0)
いひなさる	1 (1)	1 (1)	3 (1)	2 (2)	2 (2)		6 (4)	3 (3)	9 (7)
いはっしゃる	1 (0)	1 (0)					1 (0)	1 (0)	2 (0)
計	12 (1)	18 (3)	3 (1)	4 (2)	2 (2)	0 (0)	17 (4)	22 (5)	39 (9)

※()内は命令表現の内訳を示す。

※A(下→上の関係), B(対等の関係), C(上→下の関係)を示す。

※「おっしゃいます」に「おっしゃります」を含む。

※「おっしゃりいす」に「おっしゃりんす」を含む。

※「おっせへす」に「おっしゃへす」, 「おっせんす」を含む。

表3 芸妓の使用

述部 \ 関係	A	B	C	計	
おっしゃります	1 (0)			1 (0)	20 (1)
おっしゃりいす	3 (1)	1 (0)		4 (1)	
おっせへす	10 (0)			10 (0)	
おっしゃる～です	1 (0)			1 (0)	
おっしゃる	4 (0)			4 (0)	
おいひなさいます	2 (0)			2 (0)	33 (7)
おいひなさる～ます	1 (0)			1 (0)	
おいひなます	2 (1)		1 (0)	3 (1)	
おいひなんす	4 (0)	3 (1)	1 (1)	8 (2)	
おいひなさる	17 (3)	2 (1)		19 (4)	
おいひだ	18 (1)			18 (1)	19 (2)
おいひ	1 (1)			1 (1)	
いひなます	5 (2)	4 (0)	4 (3)	13 (5)	39 (14)
いひなんす	13 (2)	1 (0)	4 (4)	18 (6)	
いひなさる	5 (2)	3 (1)		8 (3)	
いはっしゃる	9 (0)	1 (0)	1 (0)	11 (0)	11 (0)
いはした(て)	1 (0)	1 (0)		2 (0)	2 (0)
計	97 (13)	16 (3)	11 (8)	124 (24)	

ながらみていくこととする。B以上には、「いひなさる」も該当するが、中流以上の人々がAでこれを使用する例は、すべて人情本『春色恋廻染分解』において、遊郭の主人蝶兵衛が客の忠六に対して用いたものであった。蝶兵衛は、最初は例1のように「おっしゃる」を用いるが、忠六の言い分に対して強い態度で発言するときには、例2のように「いひなさる」に変化している。「おっしゃる」とは表す敬意が異なると考えられるため、ここでは問題としないこととする。また「おいひだ」のAの場合、親の関係に偏る分「おいひなさる」より表す敬意が低いと考えられるため、これもここでは問題とせず、今後の課題としたい。

(例1) 夫りやア貴君が被仰事でもござへやせん。(蝶兵衛→忠六)【A】[『恋』第十五回 96]

(例2) そんならとうでも重の井は枕さがしといひなさるのか。(蝶兵衛→忠六)【A】[『恋』第十五回 97]

また、【表1】中の「おっしゃる」Cの2例中1例は次の例3である。この例の話し手は、聞き手に対して、普段、「いひなさる」や通常語を用いて話している。ここでは相手の気を引くために尊敬動詞「おっしゃる」や「めしあがる」などを用いているため、考察からは除外した。

(例3) 左様被仰さうおつしやらずにめしあがれナ。(中流与四郎→芸妓小万)【C】[『恋』第十七回 110]

4.1 「おっしゃる」系

(1) 洒落本で見られる転訛形

まず、洒落本における「おっしゃる」系の使用について見ていく。洒落本の資料性から、用例の多くは町人（男性客）と芸妓の会話であるが、中流以上12例、下層4例の使用が見られた。例4は船宿の女房が客に対して「おっせんす⁽⁴⁾」を、例5は船宿で働く若者が客に対して「おっしゃる」を用いている。いずれもAで用いており転訛形になっても高い敬意を表すといえる。

(例4) 谷粋さん、又わる口をおっせんすよ。(板見屋の後家→客谷粋) **[A]** [『甲』66]

(例5) そんなに声高でおつしやらずとも、わかりそうなこつてでございます(若者→客金) **[A]** (『角』264)

また、芸妓もAで転訛形を使用する。例6の「おっせへす」は湯沢幸吉郎(1964)が遊里語としている。上記の例4などとともに転訛形でも多用され高い敬意を表したことがわかる⁽⁵⁾。

(例6) ぬしやア兄さんが有とおっせへしたが、しつてゐなんすかへ、(道→太) **[A]** [『商』549]

(2) 滑稽本・人情本における使用

【表す敬意からの考察】「おっしゃる」系は階層によりその分布は異なるが、B以上で用いられていることから、高い敬意を表す尊敬表現といえる。以下、階層ごとを見ていくこととする。

①中流以上の人々の使用 **【表1】**から「おっしゃる」系をB以上で用いることがわかる。

(例7) 貴君^{あなた}はマア何処のお方で。お名は何と被仰ます^{おつしやい}か。(商家の娘お絹→お絹を助けた浪人安田幸八) **[A]** [『毬』第一回15]

(例8) ヘエ何御用かマアはやくおつしやりました。(佐次郎→質兵衛) **[B]** [『八』四編下219]

(例9) とくとお重にも申聞せ色よいお返事致させませう其替りには今仰^{おつしやつ}た二百両といふ所最う少〜お張込み二人扶持も三人扶持と其処に趣意がつかますれば直にも手をば打ませう。(中流以上欲右衛門→侍忠六) **[A]** [『恋』第二回11]

(例10) しかし今被仰^{おつしやる}茶入とやは千葉様の重代もの夫をどうして貴君^{あなた}⁽⁶⁾のお宅江質入にまいりやしたろう。(中流以上彦三→中流以上与四郎) **[B]** [『恋』第十三回85]

②下層の人々、芸妓の使用 **【表2, 3】**を見ると下層、芸妓ともに「おっしゃる」系をAで用いている。例11は下女から中流女性に、例12は客に、例13は主人に対して用いている。

(例11) ヲット〜云はれずは春水におつしやいました。(おはしたお初→隣の家に住む中流以上の町人おむす) **[A]** [『風』第三編下207]

(例12) 吉兵衛さんへ、先刻左様おつしやつた物がまいりました。(雑用をする使用人喜八→客吉兵衛) **[A]** [『告』第四編第十九章518]

(例13) 被仰^{おつしやる}通り玉川からお帰りなんして其後は。小万さんの手ひとつで。貢でおあげなんしたのは。なみ大鉢の事では有ません。(花魁重の井→抱えの旦那蝶兵衛) **[A]** [『恋』第十二回77]

【話し手からの考察】上記で述べた表す敬意を踏まえつつ、以下、階層ごとを見ていく。

①中流以上の人々の使用 滑稽本では、「これは詞^{ことば}づかひにはなはだていねいをつくし、すべての事

におの字と様^{さま}の字をつけてものいふくせあり」と説明されるお俳助の用いる例が見られる。中流以上の人々がBで用いるときは、言葉遣いが丁寧であると印象づけることがわかる。

(例14) さやうならばちかごろはゞかりさまながら、石臼をばお手近くへお出しなされて差^{さし}おかれますやうに、お店のお方へへおつしやりおかれまして下さりますやうに。(言葉遣いが甚だ丁寧な中流以上お俳助→中流以上やみ吉) 【B】 [『風』第四編下275]

また、例15では下層の人々と話す直兵衛という人物が「おっしゃる～ます」を用いている。その場にいる人々から「さん」付けで呼ばれることから、この人物が丁寧な言葉遣いをする、周りの人々とは階層が異なる人物であることがわかる。この例は、今回の調査で1例のみ見られたCの例であるが、話し手と聞き手が互いに親しく話していることから、Bに近いCといえる。

(例15) モシへ、おめへ今のお話では、雪女とおつしやつたではござへませんか。(直兵衛→下層町人鉄砲作) 【C】 [『風』第四編上238]

人情本では、中流以上の男女がBで互いに用いる例が見られる。次の例16、17は、男性の梅里が女性のお熊に対して、対称代名詞「おまへさん」を、お熊が梅里に対して「おまへさんがた」を用いていることからBと判断した。

(例16) ナアニ左様^{さよう}おつしやるけれど、おまへさんのはまことにいやみのない癖^{じやうこ}のない上戸だからいゝのサ。(中流以上梅里→中流以上お熊) 【B】 [『告』第三編第十六章494]

(例17) ヲヤマアいかに如才なく卑下してものをおつしやればといつて、かまひてが有^{ある}の無^{ない}のと、おまへさんがたの様な、その位心の行届^いいてお在なさるお人が、世の中に二人とあらふものなら、実正^{ほんとう}に。(中流以上お熊→中流以上梅里) 【B】 [『告』第三編第十七章499]

②下層の人々の使用 滑稽本では、「よめが、やしきづとめの頃より、部やがたにつとめたる」と説明される弥寿による例が見られる。また、お屋敷奉公に付き添った経験がある人物以外にも例19のように主従関係のAで用いる例も見られる。

(例18) さうおつしやれば勘平は働かない男でございます。(下女弥寿→女房) 【A】 [『風』第二編下127]

(例19) イエ何、旦那、とんだ事をつしやらア。(下層じゃんこ熊→出入りの旦那) 【A】 [『床』初編268]

4.2 「おいひなさる」系との比較

【用例数からの考察】この時期多用された「お～なさる」形式は、「お～なさいます」が最高敬語、「お～なさる」が普通敬語として用いられたが、【表1, 2】を見ると、「言う」の意味を表す場合は、「おっしゃる」系にその勢力を押されている。また、【表1, 2, 3】を見ると、「おいひなさる」系は、中流以上の人々の使用が12例、下層の使用が0例、芸妓の使用が33例であり、芸妓の使用に偏ることから、町人の使用は「おっしゃる」系優勢であることがわかる。ただし、「おいひなさる」は遊里語というわけではない⁽⁷⁾。なお、「おいひなさる」系は人情本にのみ見られた。

【表す敬意からの考察】まず、「おいひなさいます」は、芸妓のみ使用が見られ、Aで使用している（例20）。同じ人間関係で「おっしゃいます」を用いる例（例21）も見られる。例21は、花魁此糸に弁解する場面であるため、例20よりも意識的に高い敬意を表している可能性もあるが、「おっしゃいます」と「おいひなさいます」の表す敬意はほぼ同じであるといえる。

（例20）そふお言^{いひ}なはいましては誠^{まこと}に私が済^{わら}ません。（芸妓米八→花魁此糸）【A】〔『梅』後編卷之六124〕

（例21）おいらんエ、そりやアモウ何と恨をおつしやりましたも、少しも無理とはぞんじません。（芸妓米八→花魁此糸）【A】〔『梅』後編卷之六123〕

次に単独の「おいひなさる」はB以上で用いている。例22は、中流以上、例23は芸妓の例である。芸妓の「おいひなます」「おいひなんす」では、Cの使用が2例見られるが、この2例は例24のように芸妓同士の会話であり、いずれもBに近いCといえる。

（例22）ヲヤ大そう悪くお言^{いひ}なさるね。（中流以上お里→中流以上米次郎）【A】〔『閑』807〕

（例23）よふございますヨ。澤山^{たんと}わるくお言^{いひ}なはいヨ。（芸妓小金→芸妓お夏）【B】〔『恋』第四回23〕

（例24）また可笑^{おかしい}事をお言^{いひ}なますヨ。（花魁薄雲→新造お袖）【C】〔『告』第二編第八章437〕

しかし、中流以上の使用ではCの例が見られる。命令表現では『閑情末摘花』に4例、平叙では『毬唄三人娘』に1例見られた。明治になると「おいひなさる」はCで用いる例が見られる。「おいひなさる」の敬意が下がる早い例と考えることができ、この点が「おっしゃる」と異なる。

（例25）お前方^{まへがた}が出世になるといふ事なら、幾日何時でも左様^{いづれ}お言^{いひ}なせへ。（中流以上米次郎→おみき）【C】〔『閑』705〕

（例26）吾儕^{わたし}が嫉妬^{やきもち}をやかないとお言^{いひ}なさるのかエ（主人お富→新抱え黒山伴六）【C】〔『毬』第三編上第一回94〕

5. 明治20年代までの使用実態

【表4, 5】から、江戸後期に引き続き「おっしゃる」系が優勢であることがわかる。また、【表6】から芸妓の「おいひなさる」系優勢の傾向が見られなくなることも指摘できるが、その使用については「おっしゃる」系しか例が見られないため、以下に用例を挙げるにとどめる。

（例27）あんまり自惚をおつしやりますな（芸妓若里→お辻）【A】〔『妹』第十七回245〕

（例28）あなたがいつかおつしやつたに、芸妓を女房にするもよけれど、第一素人の手業をしらねば、世間体が見ツともない。ひまがあつたら時々には、縫物読書もならふがよい。（芸妓田の次→書生小町田）【A】〔『当』第十三回124〕

5.1 「おっしゃる」系

江戸後期に引き続き、「おっしゃる」系は、主としてAで用いられ、中流以上の使用はB、Cでも

表4 中流以上の人々の使用

述部 \ 関係	A		B		C		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
おっしゃられます		1 (0)					0 (0)	1 (0)	148 (5)
おっしゃいます	4 (1)	7 (0)		6 (2)			4 (1)	13 (2)	
おっしゃる～ます	4 (0)	13 (0)	1 (0)	5 (0)			5 (0)	18 (0)	
おっしゃる～です		2 (0)		2 (0)			0 (0)	4 (0)	
おっしゃられる	1 (0)						1 (0)	0 (0)	
おっしゃる	6 (0)	37 (1)	27 (0)	29 (1)	3 (0)		36 (0)	66 (2)	
おいひなさる～ます		1 (0)					0 (0)	1 (0)	20 (3)
おいひなさる		2 (0)	6 (0)	2 (0)		9 (3)	6 (0)	13 (3)	
おいひだ		3 (0)				11 (1)	0 (0)	14 (1)	14 (1)
おいひ		1 (1)				4 (4)	0 (0)	5 (5)	5 (5)
いひなさる			3 (2)				3 (2)	0 (0)	3 (2)
いはっしゃる			1 (0)				1 (0)	0 (0)	1 (0)
いはれる			2 (0)		1 (0)		3 (0)	0 (0)	3 (0)
いひたまふ			11 (11)		2 (2)		13 (13)	0 (0)	13 (13)
計	15 (1)	67 (2)	51 (13)	44 (3)	6 (2)	24 (8)	72 (16)	135 (13)	207 (29)

表5 下層の人々の使用

述部 \ 関係	A		B		C		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
おっしゃいます		5 (0)					0 (0)	5 (0)	18 (0)
おっしゃる～ます		1 (0)					0 (0)	1 (0)	
おっしゃる	4 (0)	8 (0)					4 (0)	8 (0)	
おいひあそばす		1 (0)					0 (0)	1 (0)	1 (0)
おいひなさいます		1 (0)					0 (0)	1 (0)	1 (0)
おいひだ				2 (1)		2 (0)	0 (0)	4 (1)	4 (1)
いひなさる	1 (1)		6 (6)		1 (1)		8 (8)	0 (0)	8 (8)
いはっしゃる	1 (0)	1 (0)	2 (0)				3 (0)	1 (0)	4 (0)
計	6 (1)	17 (0)	8 (6)	2 (1)	1 (1)	2 (0)	15 (8)	21 (1)	36 (9)

※ () 内は命令表現の内訳を示す。

※ A (下→上の関係), B (対等の関係), C (上→下の関係) を示す。

※ 「おっしゃいます」には「おっしゃります」を含む。

表 6 芸妓の使用

述部 \ 関係	A	B	C	計
おっしゃいます	2 (1)			2 (1)
おっしゃる	16 (3)			16 (3)
計	18 (4)	0 (0)	0 (0)	18 (4)

見られる。ただし、C の例は例 33 のように B に近い例となっている。例 33 は、兄から妹に対して用いた例である。B、C で用いるためか、中流以上の使用では、「れる・られる」を付けて敬意を高くしたと考えられる「おっしゃられます」（例 34）、「おっしゃられる」（例 35）が 1 例ずつ見られた。しかし 1 例ずつであるため多用されたとは言い難い。

(例 29) 那んな事を仰やいます。妾は何うかして此の姉妹の約束が真個に成るやうにと祈つて居りますワ。(中流以上艶子→中流以上お今) 【B】『緑』第四回 270]

(例 30) それでも貴君が健康な者には却て害になると仰つたものヲ。(中流以上お勢→中流以上文三) 【B】『雲』第二回 10]

(例 31) それは真実におつしやりますか(下層お辻→中流水澤) 【A】『妹』第十七回 247]

(例 32) 仰しやればじつにさやうでござい升ス(以前出入りの町人→覆古) 【A】『安』第二編下 153]

(例 33) 言て呉ると被仰たのは一体何ういふ筋が了解ぬのだエ(兄博智→妹お今) 【C・親】『緑続』第十八回 402]

(例 34) 爾仰やられますと、妾しが濟ない事だらけですが、彼兒も御前の御気性を(妻→夫) 【A・親】『緑続』347]

(例 35) 爾仰やられては甚だ恐縮致しますが、法理を精しく説立るのも無益な話しですから、事実参照して一度對審をして見た上孰れ確たる御返答を申しませう。(中流以上中島博智→中流以上春川) 【A】『緑』第十四回 306]

5.2 「おいひなさる」系との比較

「おっしゃる」系と比較しながら見ていくこととする。まず、「おいひなさいます」は、例 36 のように高い敬意を表すが、1 例のみであり「おっしゃいます」のように多用されない。

(例 36) イエ、さうお云なさいますけれど、あの水澤さんとおつしやるお方は真実にお働巧で。(下層お辻→中流以上お雪) 【A】『妹』第四回 184]

次に、単独の「おいひなさる」は、上記の例 36 と同じ話し手の使用する例が見られる。ただし、例 37 は、妹のお辻と姉のお春の会話であり、A といっても B に近い例であることから、表す敬意が異なるといえる。また明治には、江戸後期に見られ始めた C の例も多く見られる(例 38)。従って、単独の「おいひなさる」は、B 以下で用いられたといえる。そして、B の例は『浮雲』と『妹と背かゝ

み』に、Cの例は『浮雲』『細君』『二人女房』に見られ、明治25年より後には見られないことから、「おっしゃる」の勢力にさらに押されていくことがわかる。

(例37) 姉さん。おまへさんはさうおいひなさるけれど。だけれど。夕べも事をわけて段々と……。

(妹お辻→姉お春) 【A・親】 [『妹』第十五回 236]

(例38) お前から言悪いやうな事私から言はれやう筈がないスグにお言ひなさるが宜ヤネ（後妻お組→義理の娘）【C】 [『細』25]

6. 「おっしゃる」系が高い敬意を保つ要因

以上、江戸後期から明治20年代にかけて「おっしゃる」系の勢力が増していく様相を捉えてきた。今までの考察を踏まえて「おっしゃる」系が高い敬意を保つ要因について考えていく。

6.1 命令表現としての使用

命令表現という観点から見ると、単独の「おっしゃる」の命令形は江戸後期には見られず、明治の『浮雲』以降見られた。中流以上の使用が2例、芸妓の使用が3例であった。用例が少ないことから、単独の「おっしゃる」は命令表現では用いにくかったことがわかる。

(例39) 虚言仰しやい。(中流以上お勢→代言人本田) 【B】 [『雲』第十回 51]

(例40) 何も那樣に異う有仰らなくつたつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。(芸妓姫松→客葉山)
【A】 [『多』(二) 233]

B以上で用いる場合は、「ます」が下接した「おっしゃいまし」(例41)や最高敬語「～てくださいます」が下接した「おっしゃってくださいまし」(例42)を用いている。最高敬語「～てくださいます」と結びつくことができたのは、当時高い敬意を表した「おっしゃる」であり、例42のように使用したため、「おっしゃる」の表す敬意が下がりにくかったと考えることができる。また、B以下では「おいひなさる」「いひなさる」を用いていた。これも「おっしゃる」の敬意が保たれた要因の一つと考えられる。

(例41) イ、エ夫れは貴郎のとんじとやらでございませう。夫んな御容子のいゝ事がツかし仰やらないで、お否ならお否のやうに男らしく仰やいましな。(中流以上艶子→中流以上中島博智)

【B】 [『緑』第十四回 304]

(例42) どうぞ貴方からお母様へ然おつしやつて下さいまし。(妻お銀→夫周三) 【A】 [『二』中の巻(九) 293]

6.2 「おっしゃる」系の表す敬意の高さと勢力の大きさ

他の敬語動詞を持たない動詞は、「おっしゃる」系の勢力が強かった頃、「お～なさる」から「お(ご)～になる」へと交替を始める。これは、「お～なさる」の敬意が下がることが関係している。しかし、今回の調査では、「おいひになる」の用例は見られなかった。また、「おっしゃる」系の敬意が下がる

様相も見られなかった。従って、「言う」の意味を表す待遇表現では、「おっしゃる」が強い勢力を持っていたため、わざわざこの形式を使って高い敬意を表す必要がなかったと考えることができる。

7. まとめ

・江戸後期から明治20年代までの使用実態

【江戸後期】洒落本の使用を見ても、「おっせへす」や「おっせんす」「おっしゃへす」など転訛形の使用が見られることから、「おっしゃる」はすでに広く使用されていたことがわかる。引き続き滑稽本、人情本でも、すべての階層にわたって使用が見られる。階層により用例の分布は異なるが、「おっしゃる」系はB以上で用いられていることから、高い敬意を表す尊敬表現として使用されたことがわかる。滑稽本では、中流以上の人々がBで用いる場合、言葉遣いが丁寧であるという印象を与える表現であった。人情本では、男女で互いに用いた例も見られた。「おいひなさる」系と比較すると似た敬意を示すといえるが、「おいひなさる」系は、芸妓の使用に偏り町人には多用されず、明治に近い資料では、表す敬意が下がる傾向がうかがえる。

【明治20年代まで】明治になっても、「おっしゃる」系の勢力は保たれる。ただし、中流以上において、「おっしゃる」を、B、Cで使用することもあったためか、「れる・られる」をつけた「おっしゃられます」「おっしゃられる」をAで用いる例が見られる。

・「おっしゃる」系が高い敬意を保つ要因

今回の調査では、他の意味を表す語において「お（ご）～になる」形式の使用が見られるのに対し、「おいひになる」の使用は見られず、「おっしゃる」が高い敬意を保っていた。その理由として、①B以上で命令表現を用いる場合、「おっしゃいませ」「おっしゃってくださいませ」を用いること、②「お（ご）～になる」形式が台頭する頃、「おっしゃる」系の勢力が強く、「お（ご）～になる」形式が必要とされなかったことが挙げられる。他に「おいひになる」という表現の言いにくさ⁽⁸⁾、「おっしゃる」の成立にかかわる「仰せある」「仰せらるる」が元々持つ敬意の高さなども影響していると考えられる。

注(1) 「おっしゃる」の出自については、湯沢幸吉郎（1954）、藤原興一（1955）、岸田武夫（1964）、安達隆一（1968）、大塚光信（1979）・（1996）などに詳しい。

(2) 続編の場合は「緑続」と用例に記す。

(3) 山崎（1966）は「中止法や文中の使用の時には、文末の『ます』に代用させて、『ます』を省いた形で用いることもある。」と述べ、第一段階に分類するが、今回は、「おっしゃる～ます」のように区別することにより、「ます」と離れた場合に、どのような敬意の差が見られるかを示すことにした。ただし、従属節内や連体修飾節の例は「おっしゃる」の用例数として数え、今回は文末形式と同一に扱った。これらの違いについての考察は今後の課題としたい。

(4) 【表1】中の「おっせんす」は遊客1例、船宿の女房1例であり、遊廓と関係がある人物。

(5) 岸田武夫（1964）は、「オッセエス（オセエス）」は、「(オッシャリヤス)」—「(オッシャリイス)」—「(オッ

シヤリス」—「オッシャイス」から転じたと述べている。

- (6) 高い敬意を表す対称代名詞であるが、この例では互いに「あなた」を用いている。
- (7) 遊里語とする先行研究は管見の限り見られていないこと、「お～なさる」形式は当時、一般的に使用された表現形式であることから判断することができる。また、今回は対象外のお例ではあるが、第三者に対して用いる場合、下層男性の使用も見られる。(例) ぢやうだんのけて彦さんのお言被成通りになせへやし。(箱回し源七→中流以上与四郎)【A】『『恋』第十三回87』
- (8) 狭母音 [i] の連続による。

参考文献

- 安達隆一(1968)「尊敬助動詞『シャル・サ(ッ)シャル』—その成立事情について—」『研究報告 人文科学』17, 愛知教育大学
- 石綿敏雄・近藤豊勝(1973)「近世の風俗と敬語生活」『敬語講座』4, 明治書院
- 井藤幹雄(1986)「戯曲・落語速記にみる明治期の丁寧表現」『國學院大学大学院文学研究科論集』13
- 大倉浩(1986)『『おっしゃる』小考』『紀要』, 18, 静岡英和女学院短期大学
- 大塚光信(1979)『オシャル』『叙説』會澤先生古希記念, 奈良女子大学国語国文学研究室
- 大塚光信(1996)『抄物きりしたん資料私注』清文堂出版
- 岸田武夫(1964)「近世語オシャル・クダサルの系譜」『京都学芸大学紀要A(文科)』25, 開学15周年記念号, 京都学芸大学
- 小島俊夫(1974)『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
- 小松寿雄(1981)「遊女の敬語」『国文学—解釈と教材の研究』26(2)
- 小松寿雄(1985)『江戸時代の国語:江戸語その形成と階層』東京堂出版
- 辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』東京堂出版
- 藤原與一(1955)『「入らっシャル」などの「～シャル」(「～サッシャル」)敬語法について』『国文学攷』広島大学国語国文学会
- 山崎久之(1963)『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
- 山崎久之(1966)「江戸庶民語の待遇表現の体系(1)—三馬の作品を中心として—」群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 16〔『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院, 1990所収〕
- 山崎久之(1990)『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院
- 山西正子(1972)『「いらっしゃる」考』『国語学』88
- 湯沢幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院
- 湯沢幸吉郎(1964)『廓言葉の研究』明治書院

調査対象資料

【洒落本】『跣婦人伝』泥郎子(1749),『遊子方言』田舎老人多田爺(1770),『甲斐新語』大田南畝(1775)—『新編日本古典文学全集』(以下『新編』)／※『浮世の四時』南陀伽紫蘭(1784),『甲斐談角雞卵』月亭可笑(1784),『一目土堤』内新好(1788)—『江戸時代文藝資料』(以下『江戸』)／『古契三娼』山東京伝(1787),『傾城買四十八手』山東京伝(1790)—『新編』／※『南品傀儡』青海舎主人(1792)—『江戸』／『傾城買二筋道』梅暮里谷峨(1798)—『新編』／※『大通契語』笹浦鈴成(1800),『商内神』十返舎一九(1802)—『江戸』／【滑稽本】『譚話浮世風呂』式亭三馬(1809～1813)『新日本古典文学大系』／『柳髮新話浮世床』式亭三馬(1812～1813)『新編』／『花暦八笑人』瀧亭鯉丈(1820～1849)—一岩波文庫／『妙竹林話七偏人』梅亭金鶯(1857～1863)—講談社文庫／【人情本】『春色梅児誉美』(1832～1833)—『日本古典文学大系』／『春色恵の花』為永春水(1835)—『日本名著全集』(以下『名著』)／『春告鳥』(1836～1837)為永春水—『新編』／『閑情末摘花』松亭金水(1839～1841)—『名著』／『春色恋廻染分解』(初編～三編)山々亭有人(1860～1862)—浅川哲也

『人文学報』413（首都大東京）2009／**『春色恋廻染分解』（四編～五編）山々亭有人（1860～1862）—浅川哲也『人文学報』428（首都大学東京），2010／*『毬唄三人娘』（初編～三編）松亭金水（1797～1862）—浅川哲也『人文学報』443（首都大学東京），2011／【明治】『万国航海西洋道中膝栗毛』仮名垣魯文（1870～1872）〈明3〉，『牛店雑談安愚楽鍋』仮名垣魯文（1871～1872）〈明4〉—『明治文學全集』（以下『明治』）／『怪化百物語』高島藍泉（1875）〈明8〉—『新日本古典文学大系明治編』（以下『明治編』）／『巷説兎手柏』高島藍泉（1879）〈明12〉，『一読三歎当世書生氣質』坪内逍遙（1885～1886）〈明18〉，『新磨妹と背かゝみ』坪内逍遙（1886）〈明19〉—『明治』／『雪中梅』末広鉄腸（1886）〈明19〉—『明治編』／『浮雲』二葉亭四迷（1887～1889）〈明20〉，『緑蓑談』（前編・続編）須藤南翠（1887）〈明20〉，『花間鶯』末広鉄腸（1888）〈明21〉—『明治』／『細君』坪内逍遙（1889）〈明22〉，『二人女房』尾崎紅葉（1891）〈明24〉—『明治編』／『多情多恨』尾崎紅葉（1896）〈明29〉—『紅葉全集』※を付した資料は「おっしゃる」系の用例がなかった資料である。なお、「おっしゃる」系の該当箇所に関して近世のものについては、早稲田大学図書館所蔵の版本（*を付したもの）と古典籍総合データベース（<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）（無印）、明治大学図書館所蔵の版本（**を付したもの）により確認した。